

Life Design Focus

親を支える近居の「娘」

—困ったときの頼り先、会話の相手は近居の娘—

第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部 研究開発室 北村 安樹子

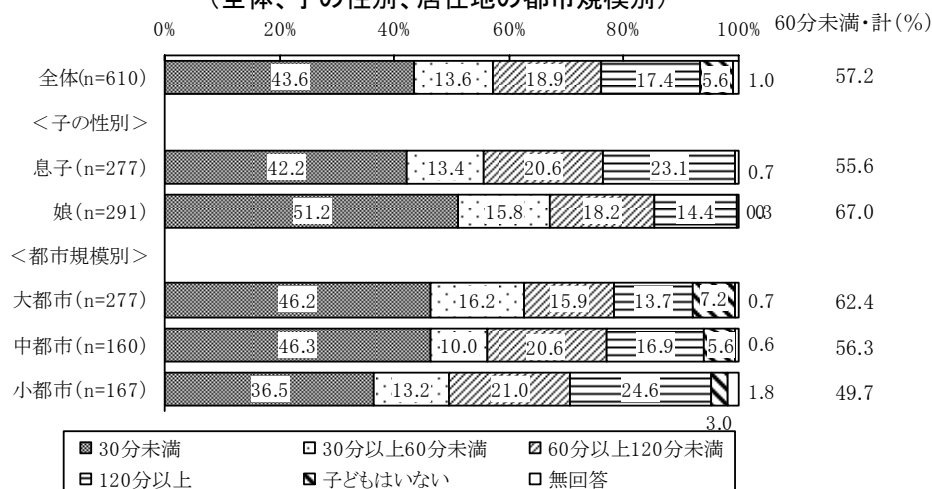
<大都市で顕著な「娘」との近居>

近年、わが国では、高齢者の単身世帯や高齢の夫婦のみ世帯が急増しており、彼らの老後の医療や介護をどのような仕組みで支えていくかが大きく注目されている。

図表1は、当研究所が60～74歳の高齢夫婦のみ世帯の男女を対象に行った調査において、最も近くに住む子ども宅までの所要時間をたずねた結果である。これを見ると、子どもが「30分未満」までの範囲に居住する人は43.6%、「30分以上60分未満」(13.6%)の人を含めておよそ6割弱が子どもと60分未満までの範囲に居住していることになる。

このうち、最も近くに住む子が「娘」の夫婦では「息子」の夫婦に比べて、また大都市に住む夫婦では小都市に住む夫婦に比べて、それぞれ子どもがより短時間で行き来できる範囲に住んでいる人が多くなっている。両者をクロスさせれば、大都市に居住する高齢夫婦のみ世帯で、最も近くに住む子が「娘」の場合、その75%までが60分未満で行き来できる範囲に居住している(図表省略)。

図表1 高齢夫婦のみ世帯における、最も近くに住む子ども宅までの所要時間
(全体、子の性別、居住地の都市規模別)



注1：調査時期は2011年10月～11月。調査対象者は全国に居住する60～74歳の夫婦2人暮らし世帯の男女700名。

注2：大都市は東京都区部、政令指定都市、および人口30万人以上の市、中都市は人口10万人以上の市、小都市は人口10万人未満の市と町村部。

資料：第一生命経済研究所「シニア夫婦世帯の生活環境と居住デザインに関する調査」2011年10月。

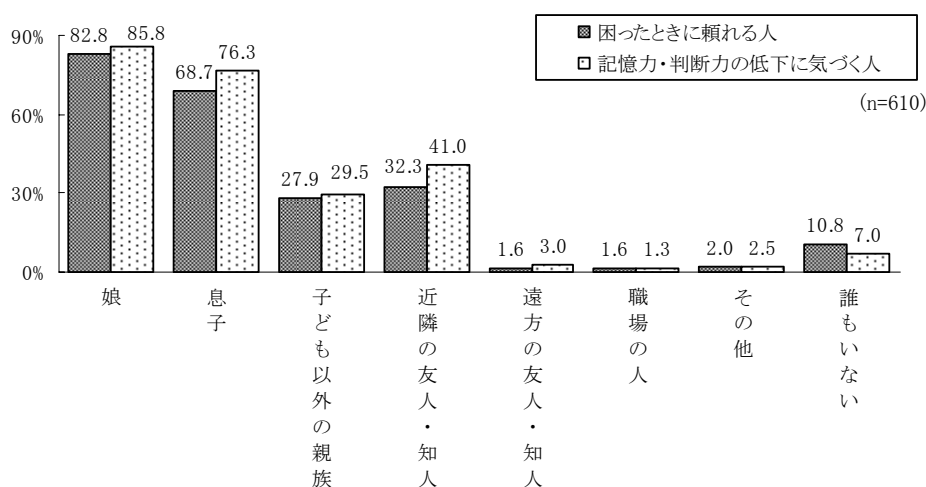
<親を支える「娘」>

この調査からは、夫婦のみで暮らす親世帯にとって、近くに住む「娘」が日常生活のさまざまな面で支えとなっている様子が見えてくる。

図表2には、同じ調査において、「配偶者以外で、困ったときに頼れる人」、および「配偶者の死亡後、自身の記憶力や判断力の低下に気づく人」の存在を複数回答でたずねた結果を示している。これをみると、回答はいずれも「娘」か「息子」に集中しており、前者が後者を10ポイント前後上回っている。

また、「娘」と「息子」の双方がいる人 (n=289) に注目すると、「配偶者以外で、困ったときに頼れる人」(娘79.6%、息子65.7%)、「配偶者の死亡後、自身の記憶力や判断力の低下に気づく人」(娘82.7%、息子73.7%)のいずれに関しても、「息子」より「娘」をあげる人が多い(図表省略)。なかでも近くに住む「娘」は、親夫婦の一方に何かあった場合、残された側の親が困ったときに頼ったり、記憶力や判断力の低下に気づくことのできる貴重な存在になっている。

図表2 高齢夫婦のみ世帯が「配偶者以外で困ったときに頼れる人」「配偶者の死亡後自身の記憶力・判断力の低下に気づく人」<複数回答>



注1: 「困ったときに頼れる人」とは「病気の時や、1人ではできない日常生活に必要な作業に手助けが必要なとき、配偶者以外に頼れる人」を、「記憶力・判断力の低下に気づく人」とは「配偶者が亡くなったあと、加齢とともにあなたの記憶力や判断力に変化が生じた場合に、あなたの変化に気づく人」についてたずねたもの。

注2: 「娘」「息子」の割合については、それぞれが「娘がいる」「息子がいる」と答えた人を分母として算出。

資料: 図表1と同じ。

<近居する「母」「娘」間の活発な交流>

次に、高齢夫婦のみ世帯における、近居の子どもとの交流の実態をみてみよう。

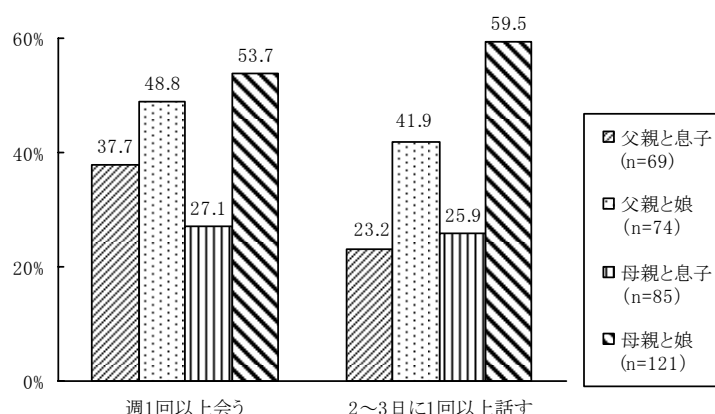
図表3は、60分未満で行き来できる範囲に子どもが住むと答えた人のうち、最も近くに住む子どもと「週に1回以上会う」「2~3日に1回以上話す(電話・メールなどを含む)」と答えた割合を、親子の性別の組み合わせ別に比較したものである。これをみると、親の性別にかかわらず、子どもと会う頻度や話す頻度は、子どもが「息子」

の場合に比べて子どもが「娘」の場合の方が明らかに高くなっている。

また、「父親と息子」「父親と娘」「母親と息子」「母親と娘」という4種類の組み合わせのうち、親子が会ったり、話をする頻度が最も高いのはいずれも「母親と娘」であることもわかるだろう。例えば、娘が60分未満の範囲に住む高齢夫婦の「母親」では53.7%が週に1回以上「娘」と会い、59.5%が2～3日に1回以上の頻度で「娘」と話している。

これに対して、「週に1回以上」会う人の割合が最も低く、「2～3日に1回以上」話す人の割合もかなり低いのが「母親と息子」であり、前者が27.1%、後者が25.9%となっている。単純化すれば、同じ1時間未満の範囲に住んでいても、「息子」の場合、「娘」の半分以下の水準しか母親と会ったり、会話をすることがないということになる。高齢の母親にとって、「息子」はたとえ近くに住んでいても、「娘」のように頻繁に会ったり、電話やメールで連絡をとりあう存在ではない。

図表3 高齢夫婦のみ世帯が、近くに住む子どもと「週1回以上会う」「2～3日に1回以上話す」割合（親子の性別の組み合わせ別）



注：分析対象者は、60分未満で行き来できる範囲に子どもが住む人。
資料：図表1に同じ

<母系親子の集住と家族戦略>

ここまでの結果をみる限り、高齢夫婦のみ世帯における子どもとの集住傾向やそこでの親子関係には、子どもの性別によっていくつかの違いがみられる。第一に、「娘」は「息子」に比べて親の近くに住む、ないしは親元から離れていかない（いきにくい）傾向があるということ、第二に、近くに住む「娘」は「息子」に比べて、親が困ったときに頼りにしたり、親の様子に変化があった場合に気づくことのできる貴重な存在になっていること、などである。

近年、都市部に居住する若いカップルの間で、子育てと仕事の両立をはかるために、妻の親の家の近くに住んで親からの支援を得ようとする動きがみられる（北村 2010、2011）。しかし、上記の傾向はむしろこれとは逆に、親を支える近居の「娘」の存在の

大きさを浮かび上がらせている。ライフステージの違いや支え合いの内実、あるいは「近居」という居住選択のタイミング等によって、「親」と「娘」のどちらがどちらをどれだけ支えているのかをトータルに捉えることは難しい。しかし、少なくとも夫婦のみで暮らす親世帯の近くに住む「娘」は、近くに住む「息子」より、親と活発に交流し、親夫婦の一方にもしものことがあった場合に頼れる存在として認識されているようである。

都市部にみられる「母」「娘」という母系軸に基づく親子の「近居」は、いわゆる「嫁姑問題」を回避し、親子が居住空間の独立を確保した上でインフォーマルな支えあいを積極的に増やしたり、増やす必要性に迫られるこれからの時代の家族戦略として定着していくだろうか。

(きたむら あきこ 主任研究員)

【文献】

- ・ 北村安樹子, 2010, 「家族形成と居住選択—首都圏に居住するフルタイム共働世帯の居住選択とその背景—」『Life Design Report』 Spring2010. 7 : 16-27.
- ・ 北村安樹子, 2011, 「フルタイム共働世帯の両立戦略と住み替え」『Life Design Report』 Winter 2011. 1 : 24-31.